

三十而立



兵庫県立コウノトリの郷公園園長 山岸 哲

今からちょうど10年前である。財団法人、リバフロンティア整備センターの設立20周年記念誌に、お祝いの言葉を書かせていただく機会をいただいた。当時、私は『ドーダ学』という怪しげな学問(?)にはまっていた。ドーダ学というのは、人間の会話や仕草、あるいは衣服や持ち物など、要するに人間が行うコミュニケーションのほとんどは、「ドーダ、おれ(わたし)はすごいだろう。ドーダ、マイッタカ!」という自慢や自己愛の表現であるという観点に立ち、ここから社会のあらゆる事象を分析して行こうという学問である。私は先のご祝辞の最後を以下のように締めくくったのを覚えている。

『骨太のドーダがリバフロにはないと、ここまで私は書いてきたわけだが、そもそも「ドーダ」には「陽ドーダ」と「陰ドーダ」があると、ドーダ学は教えている。リバフロの歴代の理事長は「ほかの財団のような、見え透いた誰にでもわかるような仕事(陽ドーダ)は、わしのところではしないのだよ。今は結果が出ないかもしれないが、もっと深いものがあって、何が出てくるかわからないのが、リバフロなのだよ。ドーダ、マイッタカ?」という「陰ドーダ」を結構かましてきたような気がしてならない。また、それがリバフロの良さなのだろうと、私はひそかに思ってきた。成人式も終わったのだから、さらにがんばって、これからは陰ドーダをどんどんかましてほしいものだ』。さらに、『ドーダには、このほかにも「内ドーダ」と「外ドーダ」などもあってドーダは奥が深いが、今回はそれらには触れないことにする』とも書いたのである。

さて、あれから10年が経った。リバフロも30歳になったわけだ。今回またご祝辞を書かせていただくことになり、設立30年記念にふさわしい言葉を『論語』の中に探してみた。孔子は、「三十にして立つ(三十而立)」と言っている。「立つ」は「自立」するという意味である。言いかえると「自身の学問の基礎が充実したものになり、自分なりの考えをまとめることができる」、「もっと深いもの

を自分で探し出せた」ということであろう。

振り返って、リバフロの今日までの業績をHPなどで調べてみると、「まちづくりと一体となった川づくり」や「多自然川づくり」や「水循環」などに関する調査研究とか、「河川生態学術研究」の運営に関わる裏方的仕事などを精力的にこなしてこられたようだ。最近、私は「河川法20年 多自然川づくり推進委員会」の委員長を勤めさせていただき、今後の多自然川づくりの方向性や具体的な対応方針についての提言をさせていただいたが、その際のリバフロの資料収集・統合能力には目を見張るものがあった。

しかし、ここでまた「ドーダ学」に戻らせてもらおう。今回は触れなかった「内ドーダ」と「外ドーダ」のことだ。まず「外ドーダ」を説明すると、外の力を利用して「ドーダまいったか」とやる方法である。例えば私がよくやる、「最高裁の判事をやった才口千晴って知っている? あれ、おれの高校の同級生なんだ。それに劇作家の別役実知ってるよねー。あれも高校の同期生なんだ」とドーダをかますやつで、要するに外力を使って結局自分の自慢をするのである。女のひとは結構これが好きで、自分の亭主・子供・孫自慢などに良く使う。これは、まさしく「外ドーダ」に属する(もちろん男もするが)。もう少し高級なところでは、皆さんが学生時代によく聞いた講義などは、たいていこの外ドーダを使ったものが多い。曰く「ドイツの〇〇はこう言っている」「オランダの〇〇はこう言った」などなど。また、現在さかんに行われている「日米韓合同演習」などは、この「外ドーダの互助組合」のようなものだ。

つまり、リバフロはこれまで調査研究に外部の偉い先生方の力を借り過ぎたのではないか。いわば「外ドーダ」過ぎたのではあるまいか。設立30年を過ぎて、そろそろ、「自立」した、自分たちの「内ドーダ」をかませる時が来ているように思うのは私だけだろうか。「三十而立」である。